



2913
27

昭和九年
七月六日
終末

五

當初漢の景帝は母傳姓の長老の家を四女
 有りて姉妹共不感賢なるの長老男も亦有りと
 懐心四女は其父母は孝を以て之を不夫と
 化し嫁を以て父の男も亦其母を以て之を不夫と
 寧ろ其男子も亦其母を以て之を不夫と
 其孝感の致しては後死に極るを昇天祭し我
 里を去るに相成建てては終て四女相とすなり





阿世壽

阿袖

阿嘉女

阿道

(四)
 賢女令顯椿上
 稗史功成固寓言

養高正書 晴眼



貞操婦女八賢誌第九輯卷之一

東都 為永春水編次

第五十三回

雷火轎と破して一賢女と助く
 方燈二消て悪少年と走る

再説舟月子伊太いかの泡之助が前髪首とお梅が首級と
 思ふのころ八代とて一向におたあんと憶ひ遠くへ既小擒と
 なるしう威是自己が柄ありと心の裡ふらうり誇り
 稲毛の陣屋小左殿が道い妖術ありとりの支條傳へも
 所々へ赴き曲老ありとて岩を獄屋ふつるまきおん

ひど ーらす ひきひ
日毎小白洲へ引ゆーてその身のうへの言ふもさらあり 同忍の
處女々 行辺も白状せよとて責問も八代に首より音傳の族の
女少て公道とやらんゆゑ老少の更ふありとて言ふのも後程
同做まことども因る服と二年もせよとてよりゆゑ日と夜も
ふ伊太も死々ゆゑありて胆裏も懐ふ事 這處女々大膽ある俺が
かかていなるー小白状まききやうもや 其久幻術ある若うれば
ぬく獄屋も繋ぎ垂くうらぬ迹さんも測られを金とて熟くと
け捕る成敷も長も上げ首うち房さば某がわつて後
とあるべきりゆゑありて女とわかれか柄と首と俣俱も張念も長く
女八けん九へん上二

ひまどー ー 余まききバ自己が柄も取れまききは久人城まきき
ありと既ふもひ定めーうバ懐ひどー八代も桎梏と枷と
網輪もりち宗せて縁て遠漬ふ做し措ぐる又那も柄も首と
ひとつの壺も入るまきき是とも俱も齋しつと伊太へらら致も固ら
稲毛の陣所とまききおれーも五月の下院 這日ハ然る又まきき
改次の際もあらまきき十里も越る新徳もれとも張念まきき日
着ふせんと頼りも人丈とまききせつ 精加奈河の張とまきき井
伏まききしに俄も天のか死より一庭も現と張せしと電
さ入るげーしに俄も天のか死より一庭も現と張せしと電

あふ松屋へかの轎と軒飛由まふ侍ととらぬ夥長皆も
遠形勢小後術あり佐ふ流ドと松の根小ひとくまうりあり
る処へ一語をげしき電の言一文字小流がまがまて命と
積ま由ありふるさ由友地同流して伏るさうりつて作する
か申小由八代に悠ると見とて些とも初世まで電の言ふて
松栞の刺さる小個橋を破きとて天の助と歎びつ舞小裡
より我へ出するさ由伊を答む從下生死由知まぬ形容
あるあを独り完ふとらち笑て逃れ去らんとあさりしとき
那轎のかさむら小形併と名一見一個の小奴が是もかきく

女八代八人上三

電小同後せしう備伏小踏びさるまき生体ま名が首小掛さ
状食の結びし紐のおのづと切て裡より落敷くさきあり
心ともあぐらち足まび当名ハ岩發典物どく強念うりと
幕さるのこ下の衣着の知とねども這典物とまき去る衆の愛小
印くうちあはるる那泡々助が聲と同名何れもあま這合
物環ハ仔細の分明うんと封切り破つてお響き縁返
し入てうち積き這文面の様子でいか毎の尻のたきひあ
光非さなと懸恙と竊ふち獲してまのり積又小
楠菴で長長と揚ぐ死企あるとめの典物かえ出せしやへ

はなとてとどくし総検校のうへに運長と申す所長家系を以て身
として今後念ふあつてもいそ甚者どもへ内をきかして是れを以て
是れ向らざるべし典物たるものも業門者となり力と闘んとし
かくりしあつて是れ正しく返書せしむる日ありて是れ人教と對向
するべしそのと死力と念ふこと上首尾よく集めて付くは
さび友成へまじりあげうまゝまゝと申すせんとおの違ひ一
車の密書あつて測らるる俺もあつて入るらん是れを以て
久の川運をせしめたるらんときふと死侍より侍の死侍が
地獄生けんまといふより續きて大車の一色集りてい

後不念一奴が落度女め居せとむやあつくと八代強が
掉と申す續ぎて松んでづんと申す投らまざるも郡下奴が
我も密書と取返しんと起んとあつて肩先へ行接りて
推展する其とれ文侍をも息あきくへ是れもあつて
取返しとて一たびと周章あつて走りより只一下付と
かると右と左と尻身をわいて是れ下み又と踏止ぬる密
書と懐く携死おさめて完全と笑ひあひひげらるる雷の助
げふ逃まゝ一這縛索今こそ名乗るるこゝに依り太官候の
おたふあつねとも郡下及るる世より遊むぬ中の義持妹



俱小を流す由縁ある八女の一個と嘆きける八代まうと知ら
ざるうゑまを吾儕と轄小宗せ送つて来やうと礼なりあひ
そふ方の骸と生作りその庖丁の切味と餐飯異人と云ひつも
又飄然とうちあひし生女不似る死不教の魂珠小は
妹も知つたれば及びごとくと思ひまがらもあはれも今ハ一生
幾今再び又とひらめくして封ておくと物ともせぬ那方遠
方須臾をうちあひしておとる白刃と奪ひとる是ハと孩
ろくあはれとあはれりの肩より乳の下へ行くるあはれ
さげとる遠と又まゑり遠方ある以糸の花飾の腰刀と竊

女八代九人五

ふささりとと抜をうし声とゆうけぞ後ろより服後目かけて
突は鬼と八代速くゆえ返りて身とひねりつ横さな小
丁と挿ひし又の雷光是も首とうちあはれ血潮り立て
あ人の右と左り不死しうけり八代是あはれ眼もくれを
獨りつづく名案とまをふか格が首の尻首あつ小俺が
身とお及と又遠くへ擲めとらうる袖されば那二女あは
恙まうくん小まま二個が身のとらうりむお怒る密書の
文面ふし愛さくもあるられ先容鞍ふおきくお由とやら
んが根子と試しそらう人伴の典物とお由お討まう俺が討

たふも衣ふも料らむは美衣非君両方のおん身のうへも
だし湖とそあれとうち領きと侍をが侍當ふ君がせきりし
柳籠とびひくきつらふ其月の所持せし縁色波風の金由緒
奴も月外下あざらまじらるが威遠裡ふ収めあるあを先その
ふと身ふつけつ後めの盡ふ入まじらし泡々助ま首とさへ大柳
つ搔抱ききて速くもその場と落美しとと侍をが寝無由
侍齒も最本の雷不息終らるま、今もま不むのつらで飛り
し又の妹ふ怖まじらるる老もまじらしとをまひ侍あき
ま柳の月外浪の危難のわらう勝の三嘆女と見えん
かへん九んとふ

あつた辛く砍抜し六何年か番と免めんとお様武彦のつる
とと腰も、索ねぬらうち武彦の玉分で測らるる由ふ
回會し六互ひお在りし物持りと同ひつ同りする秘ふ
或の悲しく或の歎ぶそのむと懐んとまるふとくく
けまびたての浅しう終るめめ対面ふ二女い方とゆらるる
那お捕獲が乃方いさらまりお電か竹が在るおも心と合せて
尋ねんと只管然方と奔走ふ素外や做けんま柳の逆き次
より眼と痛て新の珠受ふえくごけまび所法と喰う飲の
今も旅床ふ二三日逗留まうく居りしが病目も測不快ければ

木柙をぬき不残一か安の一個近郊と繕ねて又んとて出
 たり候日の餘れども敏里未だ候池一と不柙の
 ころこよとむひつてけ懸ぬれその如く十五六あり女
 按麻の爪用なる火を陣子我一お言ふと柙の
 妻ひ肩の強くをむらわらげ共よと執むあを伴の素
 磨の心ゆて流て後ろなきまのり肩より獨くと按かると
 ま柙餘ろ不見かろく吾儂はは以運と目あや昏不のれが
 りよくかまると和女の秋さ入宜くも又ぬが歳も多ふいふ
 りざる柙の信る條作不吐やうの和女も信の支眼が不自由
 女八八八八八

ありうと問うけらば件の按麻の歎息して又女もか目ぐ不
 明とう私めふと病うら逆は流すこ縁盲女一個の母と
 中ぬ衣ひるね給ゆまき不旅ある元の情の妻相と其の受け交
 と世の上親と子ご家の命とつゞき若まご標列ぬ細腕不
 利のぬ療治も又由人ふか気味が懸くも捨ててとよふも
 涙のりうと声寔一やう不所ゆきごと由妻あり渠の替女不わを
 糸不吐くろ魚少半那宇女を麻が身の結果あり筒不衣鞆
 跡由て典物がごめ不違るる條存の底く扱らむと不條の
 ありて恙なく命ひとつの捨ひうと大六と燈を殺して棄

ひー黄金の持りゆく威儀包み入るまゝ那処の傭小をさる
久く身小柄のあらざまゝ又素何とも做まざるやうやく公
とも奸智の曲若りれば女姿小ありしときひ仮小盲女と詐
りて遠所ありし小呻吟来り旅床とて欺きさへく按て小
締ませ後ちの小残あんどと遊ばせたり終ふその日と送
まらるりとも知れざれば青柳の渠が辞と深く憐れく程
お流とうちゆく程小頻り小眠れと憐れく程へまらるとく
臆まると字女を席の尻そぬへて探り来りつゝ青柳の橋小
まらひー咽巻とそらりくと引物なまらんとする程小

あつたぎとちまらちあぢち さあ ぬまをさる のが
まら柳忽地寝きそえて偷女あり遊さとと跳菟とと挿えあす
えづこ小形灯うち消しへ遊名小あひ一は女もえんぬ病
眼のそのうへ小黒白も判るをまりしうへ遠の口惜とあふ
間あこらあふのねさうと字女を席の隙子と隙外へ
隣をへ遊出さう ぼろ寝ぎ小度ゆまこああぐ 灯を
ゆり消して闇のあやまり字女を席のわの朋をを奪ひし
まら迷くゆその場を奪うける

第五十四回

金と考りて青柳良友を得る
能言と挿へて阿道旧事を報る

そのまゝに隣を渡り合せし旅あり是すまらち別人
案卜件の隣を渡り合せし旅あり是すまらち別人
あゝとて子衣奈の女児か龜あつた渠の道し日流倉あて父の
能言する愛嬌を討てお安と恨み走りし由井が深辺の
小舟のうちか飛びあつたうま推流さまで忽地お安が
別まじりのころを身も既小危ううじと幸く舟擺を操
りて去るのよは案渡り件の舟と漕舟しうぶか龜の獨り
あつたゆり旅令返隊の捕圍しとて武勇務まらぬ安あ人
次校し変疑ひあけたと渠が安危も尋ねべく又あつた
お安が女児かの鳥羽玉とも討とつて又の送恨を報りんと
大げんかんと

仮小坂東鳴礼の賊の女女姿とやつしを迎とあて走どり
今宵運家お歌店を覓りて旅の勞を休むるおうら隣
危後の燈初め灯とさ人もうら清さると遠の竹麩素河と
強ぐぬ遠方の間より高柳が尚遊さどと定むるお合
がらあか龜とびおん定女お舟とあひ遠くを標作さんと組
つてあてか龜のらあて強きつ仔細の事あつたおまさんと人圍あし
あまがえ判ぬお珠さら大急の折うらまねは只一言の間言
とも做べきいさ女のあつたお人捕あさんとは是もまじり俱あ
春とまらううて送ひお事お其折しお秋及と急いお飯

と暮しお安の一間お枝こ入り飛方へまじし桃灯の火うげお
それとてふより由二女が申とお隔ておひびきあへぬ
柳さんといは侍のと言ふおま柳登りきて入ぬ病眼も桃灯の
光りおまときかへて果して後方お身とまらまらげお亀も
是れ又物り俱お辞もあつらふお安の獨りうち笑て
先那二個を引合せ仔細何と諮ぬまらま柳の最面
あげお侍のまら女がお安とお安さんより笑及びお亀さ
あておんせし私るのま柳とてお安さんといは侍様お
しと登りおまらこの由まらいお安の不始お安へその仔細の
おらくと筒お眠を催せしと女按テが朋巻と引
出せしと返りんとて灯火の消しお途とまらひお亀と侍の
按テとおひまのまら及びしと辞短うおお侍
兼忽と勸解さあお亀の再び登りきてまらと教ふお知
らまら那と死迷く曲若と力と合せて捕へんお知らまら
とて是張もまら言ふおりの朋巻とまらひまらる倫女
まらまらあてお拾おれぬま柳さんいおのまらお眼もお
不ぬお枝子お人我等二個でお安さん先曲若と返止んと
りおお安も息返して俱おまんとするおとまら柳登りおわし

しと登りおまらこの由まらいお安の不始お安へその仔細の

禁めか二個さんのおとろぎの遠身ふよつて焼くいなれと
那羽奏と夫のひーとてさるの初まらる僅の金なり返さん
とてか二個のお身小怪我を由あつての海まぬ熱くあぐん
曲者の遠強勃のありし由おひひりきくお龜さん小遠
対面いせーあ〜ん偶余もあ〜ん一重障子ひと入ああり
さ〜ん一色を色仕変由あ〜ん熱すまが金と棄つま〜ん
却ては身の偉めてかの塞が飛が馬とやららるる由も
あ〜ん一交等のるりうち損て同ひ〜んりも夥あ〜ん
ひ〜んめ始由あ〜んま〜んばと林あ〜んら〜んて由あ〜ん人〜ん遠
あ〜ん損ぐ〜ん物とくせんと焼漢物〜ん由あ〜んひ〜んるん意は
よりその曲者の私等が為より挿へてま〜ん一と〜んま〜んひ
あ〜んるとま〜んひつ〜んもあ〜ん梅おたの二渡女がかの字女を所と
あ〜んめてま〜んく〜んて由ま〜んま〜んばま〜ん柳お安い愛うとた〜んり
あ〜んびつ又頼ひつ須更果ま〜んて居〜んるあ〜んをかたお梅の笑
〜ん乳小伝お亀小會親〜んて遠方の二個お対ひ〜んら〜んり
ま〜ん柳さんあ〜ん隙あ〜んて別ま〜んか安さんあ〜んお判てその前
の目の鏡ひふお海方おま〜んをま〜んりし由人生乳の袖由測〜んね
心とるやま〜ん一居〜んりしお徳〜んく〜ん急あ〜んま〜んか目り〜んら〜ん

ひ〜んめ始由あ〜んま〜んばと林あ〜んら〜んて由あ〜ん人〜ん遠

何れも此の坊まで死なすも猶くも私等二個が試曲若を引
 連れまつると血舞してゐる人だ先その所留とせてと人と
 過ぎ日流産と吹抜てお門村おのりしりよりお梅が病
 気の茶と湯めおかたが性う途仲あて守女を命がぬお
 かりお袖が命と預せりゆ又その血しんとお梅が旗へお
 門村おまじりしおまより先お袖が亡魄お梅の跡お
 婆とあふいその身の跡しお梅の影けれども顔て自己と
 おろド名のお袖といふ一賢女ありて永く姉妹の義と
 従はんといつせりまをあもり物語りつかたが言ふ

お梅の乳の余の

中う私の家の秘法あていまで男お構ざる先女の乳の余の
 血しんとあふいその底にお梅をかきまが如物多る破傷
 凡おてお液其どいひゆりあてとすくお梅お梅が生血
 あて病と愈いひゆりあてと言ふともお梅さんお梅さんお梅さん
 衣より是と羽ひひの心を争ひ果しる死折しお梅お梅一
 個浸へて我え入るる一匹の杜若腫しき血しんと言ひひも
 つ不お梅さんお梅さんお梅さんとすつとまじりお梅さんお梅さん
 血あふとお梅さんの言とお梅さんとすつとまじりお梅さんお梅さん
 絶えぬお梅さんお梅さんお梅さんお梅さんお梅さんお梅さん

お梅さんお梅さんお梅さんお梅さんお梅さんお梅さん



さりと私と月が 踊り舞つて仕人とまると懐ねとらうと
根をきく 腰のつらみと吹をきく 返ま又お仕老と由唯一
結と押あさるる花をさうつ仕老をヤレゆ人おたさあひふ
よりありと禁むると遠方のさる眼と想らひ此於不及びて
仙とさくくべきお松さんとさ失ふうい俺身由今い一生幾
命をさすの供不運ゆんと又吹萬ると死退てお心急迫の
理りまうら先はおと川流あまると死田紋の風長安お
つとく一首と先おせ一宗子ありけまうるまひお妹く又の
ととともめ其斬首いと後ぬまは那仕老の辞を編め私
この遠家の主老女がとあふの櫻ありてお理森お友が
従者ある名と綱六と奥の若六浦へいりし故りぢや
いの版で測ら志も天遠くう方凡長安包と筆して又まは
這首の女後さおをさうりうら捐んうと名ひしが又つくと
お按とあまお鳴とさ一津戸の強勃その女女等ありて
所くお理森お友が主筋とら今い首とつるとさう美気流お
えおまともお男とも女とも自己が月あ判がと死おは小包と
所持せしも又さし獨りの女女あれば備は首がお理森等お
由縁の女女が首おしと昨日津戸をて討まりと伴の女女が

携へるる支とて由又尋らまはせぬお由衣お由持ぬりて叙
母不見せざる分明ありんとて後持て候り及大井の里まを
来り於しも指毛の陳代舟月支仔をぞ叔母と結め引立て
来つる不測らざり遭てのつびさきぬぬ体てづめの懸あんぎをぬ
ましりすの箇根とて生場の根子と物送り候りた由あり違
人殺めて俺酒と捕圍まると死あつらのか二女と由不救ひに
殊とあり叔母と人殺不夫らまじ弱よひもあるされが款かたを不
ふりてと名乗とさごも又惚まよふはひらと人集あつれぐん小由め
とさせんとは夥あま兵とて又送しよぐて脊せどをまを奪さらつ害やうすふとすふ

今か二名が那血し不めて争ひ果しあつざれば故わざと血し不と
奪へる振うりめてお持もちさぬあひあつりしお初はつて支が仇あてとあり忽たち
休息の絶たまらまじつが初はつくまづとも名のねが不名義なごふは不
入いる以背よみとお持もちさぬと言いひらと人か及およびぬと捕とら逃ぬせしと
支仔しよをぞ恭まへと款かたきとてお二名ふたりさぬとも俺叔母おんぢうぼとも救すくりぬの
お按おんとせしおその甲うら受ひありとてに惜こけまこと悔くやめが俺おん身みも
疑うたがひの晴はれても晴はぬぬ血し不の利月きげり衆しゆの和法わふと所しよつるが
遠とのとも争い何ななる故ゆありんと馬あまと懸まへるそのおありら
休やすむとてお持もちさんが獨ひとりむつくと記おき事ことの三さん個ごさんの問もん答た

と現ともあきつて一とあへば忽地其の元なる如く討ちやうみ
惚ともあきせむ心地も常ふ智らまるとりふ飲ぶれとる細
六の高作晚お地をてお林さぬのお怪の初く候をひひと
はとも逃く候の人と言われまづも初のみ道ふをあらは
程危がごとく性あると細さつて任しく箇根さふる人
准彼の船さへおへうらば今更委まんやうもあき伴の船さ
の平ありつる家さふあつて約録ふとの間ふ細六の我が家さ
火とらけく忽地その場をさきししが姑くあつて那老女と縛
めつるまう俺もふ家さへへとおもふとて其のまはらるるあ

迷くもを女の索と解て細六が赤かど箇根とて報知るあせ
老女もろめて教ひ候けん恨ふ程さそのうち私さ二女の系とあ
とそ精芝浦は漕舟さあそ約録さる六細六由陸よりは如ふ来
合をて徳事何せんと結合ふお林さんの心病氣の初く遠らふ
疾ううらひ候の賢女等の安んきそんがりもお持かへべき
あうねの是より結ふと常ねめらる簿の序ふお細とら眞
処女のう人とさへ心と付てえをそとりの伴の老女由細六も恨ふ
性んとさきひぬると林あて井里お夜と別ちまより後の只二女
先當ふより候もあき走れごんとあひまめて油の縁石も

めと舟の心と酔うつ今宵遠家小泊り一更給江の女と
あつちうとけまうらひふた者の家子と是波岡の紙こし
奥の一回小二の目糸より遠ぬせらるゝ處女あり一更の夕ま
眼と痛しとて産安小籠をて他人の物とて又今一更の物やん
病る人のあるより少く近たつとを走回し今宵由のまを飲ら
まをさこの小年紀懐妊何とやらあひ合はるるやあまが小籠
きんとも示し合せ宿小籠をて宿願りんと遠慮にまて忠び
より之听のせむ声者のま柳きんふゆるゆ人扱へとあふ
その折う一院の隙子と隙をりて庭へ逃出を是るる

曲老月のゆり小遠り一更れば婆の女子ふ打拵とも月外
お袖と又小る子一字女本所小てありしうは後まのまを飲びの
あまをさこの小年紀懐妊何とやらあひ合はるるやあまが小籠
きんとも示し合せ宿小籠をて宿願りんと遠慮にまて忠び
より之听のせむ声者のま柳きんふゆるゆ人扱へとあふ
その折う一院の隙子と隙をりて庭へ逃出を是るる

うの秘のりさも隔多形うららみゆりなりと是まを
まつるお流りと辯采う小流るあまが柳も流るる所を橋の

言^{コト}法^ハと副^{タテマ}方^{カタ}長^{ナガ}法^ハ小^コ長^{ナガ}柳^{ヤナギ}か^カ安^{ヤス}ハ^ハの^ノ人^{ヒト}も^モさ^サら^ラり^リる^ル儀^ギ
中^{ナカ}せ^セか^カ龜^{カメ}さ^サ人^{ヒト}小^コ孫^{ソノ}の^ノ我^ガむ^ムと^ト紀^キへ^ヘぬ^ヌま^マで^デ小^コ身^ミを^ヲ補^ホふ^フ
所^{トコロ}居^イる^ル必^{カナラ}竟^{マタ}二^ニ名^ナが^ガ物^{モノ}緒^ヅり^リ果^ハて^テ又^{マタ}争^{マカ}ひ^ヒま^マる^ル隙^{ヒマ}も^モ
ある^{アル}所^{トコロ}ハ^ハ次^{ツギ}の^ノ回^{マエ}と^ト又^{マタ}て^テあ^アる^ル人^{ヒト} 村田

貞操婦女八賢誌第九輯卷之一

貞操婦女八賢誌第九輯卷之一

